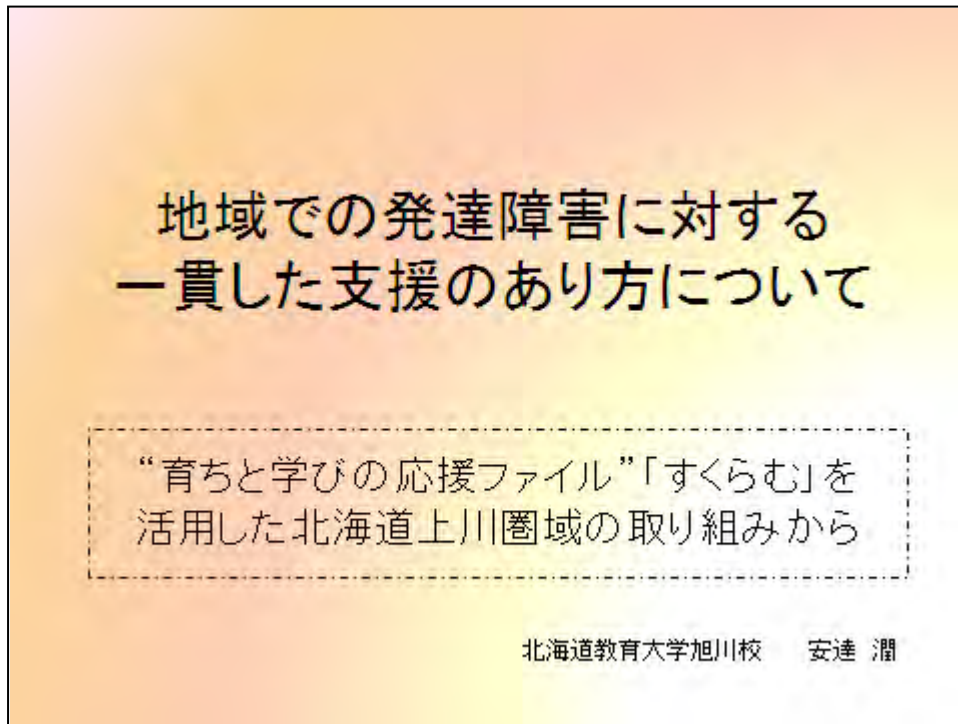


1. 上川版個別の支援計画“育ちと学びの応援ファイル「すくらむ」”作成の背景

01



02

発達障害が投げかける大きな課題

- 不登校問題(杉山ら)
難治性の不登校の30～40%に発達障害。
旭川市でも同様の状況。(武井ら,2009)
該当ケースの90%が初診時未診断。
初診時年齢が上がるほど被害念慮増加。
- 非行問題(松浦ら,2006)
少年院入所児の60%程度に発達障害特性。
多くが過去に逆境体験(虐待など)を併せ持つ。
- 就職後に不適応に陥り離職するケース
社会の「常識」、出会った上司のタイプ、等

発達障害が投げかける大きな課題は、人生早期には発達障害の把握がなされず、後年になってから不適応に陥って、事例化する方々の困難さに認められます。不登校に陥ってしまったり、虐待体験が重なることで、さらに適応が悪化してしまう子どもたちの存在もある。社会に出るまで大きな問題はなくても、職場で不適応に陥ったり・・・。

発達障害の早期発見が 求められる・・・

・・・しかしそれは容易ではない

だから発達障害の早期発見（把握）が求められます。
しかし、それは容易ではありません。

高田ら(2008)の研究

- ・ 通常学級在籍で特別支援ニーズを持つ子ども達の乳幼児検診におけるリスクの指摘率を調査。
- ・ 未診断の小中学生285名。調査時に診断を実施。
- ・ 高機能広汎性発達障害
：1歳6ヶ月健診 26.2% 3歳児健診 33.0%
- ・ ADHDやLD
：1歳6ヶ月健診 約17% 3歳児健診 約21%
- ・ 学齢期に特別支援を必要な児童生徒のほとんどは乳幼児検診でリスクを指摘されていない。

では、健診で発達障害を「発見する」精度を上げれば
すべては解決するのか・・・？

小中学校の通常学級で特別支援ニーズを持つとされた未診断の子どもたち。この子どもたちの中で、乳幼児期の健診で発達リスクを指摘されたのは、ごくわずかでした。この状況を打破するには、乳幼児検診での発達障害の発見率を上げるしかないのでしょうか。

発達障害支援に関する北海道調査(1)

- 発達障害の親の会の会員に対する、過去に受けた乳幼児検診の回顧的調査。
- 発達障害リスクに関わる保護者の気づきは2歳までが50%強、2～3歳で約25%であった。
- 1歳6ヶ月健診でリスクを指摘されたとの回答は約30%にとどまっている。
- 診断時期は3～4歳が約40%で、小学校期が約30%となっており、気づきと時間的ギャップ。
- 乳幼児検診結果に対して納得・ある程度納得は、3歳児健診で67%だが、1.6歳児健診では45%であった。

確かに、発達障害の子どもをもつ親を対象とした過去の乳幼児検診に関する北海道調査でも、乳幼児検診での把握以前に親は子どもの異変に気づいています。そして診断時期はそれよりもさらに遅くなっています。しかし、乳幼児検診における発達障害の発見率を上げることは簡単にできるのでしょうか。発見精度の高いスクリーニングツールを開発することで問題は解決するのでしょうか。

発達障害支援に関する北海道調査(2)

- 発達支援者側に対するアンケート結果
- 健診などで把握したリスクを保護者に伝えることについての回答は、「ほとんど伝えている」が47%で、「状況によって伝えたり伝えなかったり」が約50%であった。
- 保護者にリスクを伝えづらい理由として、「障害を認めたがらない」「十分理解してもらえない」「動揺することが予想される」「次回の支援につながらない」といった回答が全体の約77%を占めている。

健診担当者の側にも理由はあるようです。つまり、リスクを把握していても、乳幼児検診でそのリスクを親御さんに伝えづらい状況があるのです。

支援をつなぐことの難しさ

- 発達障害の子どもは保護者も回顧的に考えれば早期からの支援がもっと充実してしかるべきと考えている。
- 支援者側は、早期から支援を開始して、子ども達の健やかな育ちを願う。
- しかし支援者は保護者にリスクを伝えづらい。
- 結果、現状として、つながらない。
そして、育ちの困難さに陥る子ども達がいる。
- だからこそ「早期発見」が求められる状況に。
- そして精度を上げてリスクを把握して伝え、支援につなげなければ・・・という方向に。

早期把握は必要。過去を振り返れば、親御さんもそう思う。でも乳幼児検診の頃の親御さんの気持ち、子育てに不安を感じている気持ちに「早期把握」はうまく馴染まない。発見精度を上げるだけで、解決に向かうのでしょうか。

早期からの支援の充実とは？

- 早期支援のために障害ラベルは必要か？
障害ラベルで早期支援が可能になるか？
→ 「障害ラベル」と「支援」の間の大きなギャップ
- 子どもの育ちに不安を抱えていた頃、親御さんはどのような支援を必要と感じていたのだろうか？
→ 「障害リスクを提示されて
療育につながることを望んでいたのか？」
- 早期支援の進むべき道は？
①できる限り早期に確実に発達障害を発見し、療育につなぐ。
②できる限り早期から親支援・子育て支援を充実し、その基盤の上に療育をつなぐ。

早期支援に必要なことは、発達障害リスクを示す子どもだけではない。子育て不安の中にいる親御さんにも支援が必要。親御さんの支援を障害ラベルが妨害する場合もある。親御さんが望んでいるのは、親子で楽しく過ごし、安心して子育てができることではないでしょうか。だとすると早期支援の進むべき道は？

発達障害支援に求められる方向性

- “育ちと学びの応援ファイル”「すくらむ」が選択した方向性は ②。つまり…

「できる限り早期から親支援・子育て支援を充実し、その基盤の上に療育をつなぐ。」

- 「すくらむ」とは…
 - : 障害の有無に関わらず活用できる子育て支援ファイルとしての相談支援ファイル。
 - : 出産前から乳幼児期、就学前、学齢期へ。
 - : 障害ラベルではなく、子どものありのままの様子から「支援」を考えていく視点。

早期支援が進むべき道は②です。しかし、②の方向性は「診断が必要ない」とか「療育が必要ない」ということではありません。「子育ては大変だけど、なんとかやりようがある」という安心感をとにかく持ってもらいたい、そのための支援がまずは必要ということなのです。そんな地域を実現していくべきと考え、私たちは「すくらむ」を作成しました。

「すくらむ」が目指す地域連携とは

- 人は誰も「独り」では生きていない。
- 支援連携の意味
 - 互いに補い合って、支援すべき人の人生に向き合う支援を構築していくこと。
- 連携を通じた情報伝達（引継ぎ）とは…
 - その人の「あるがまま」を理解してくれる人の輪を広げていくことであるべき。
 - その人の「不適応の在り様」を事細かに伝えていくことではないはず。
- 周囲の人が、その子どもの「よさ」も「気になるところ」も理解しようとする視点を持っていること。

地域連携とは、その親とその子に対する理解の輪を広げていくことであるべきです。けっして障害特性に起因する課題を伝達していくことではないはずで